

# 過剰適応概念の検討と再考

○今田 奈緒・中島 健一郎

(広島大学教育学部第五類心理学系コース・広島大学大学院人間社会科学研究所)

## 目的

過剰適応は、自己抑制的で自己不全的な内的特徴を反映する内的側面と、他者の期待に沿う行動や他者志向的な適応方略を反映する外的側面の2側面から成り立つ概念である(石津, 2006; 石津・安保, 2019)。過剰適応の測定尺度の一つに石津(2006)による青年期前期用過剰適応尺度があるが、問題点として関係一般的な対人行動パターンとしての過剰適応傾向を測定しているため、個人が様々な他者との関係の中でどのような過剰適応状態にあるかという実的な姿の把握が難しいことが指摘されている(風間・平石, 2018)。この点を考慮し、風間・平石(2018)は関係特定性過剰適応尺度(以下 OAS-RS とする)を作成した。これは両親・友人・教師に対する過剰適応傾向を測定する尺度であり、それぞれに対する他者志向性と自己抑制の6因子からなる。

過剰適応の定義を踏まえれば、過剰適応傾向が高い者(以下過剰適応者とする)は社会的に適応しているように見えても、心理的に適応していると言い難い人々だと換言できる。そのため、過剰適応者は内的不適応感の早期検出が難しいという問題点が生じる。先行研究でも過剰適応者は第三者の目からは周囲に適応しているように見えるが、精神的健康では臨床群とほぼ同様の問題を抱えている可能性(益子, 2009)や過剰適応傾向の高い子供は自己不全感や自己抑制する部分を他者には見せにくい可能性(石津・安保, 2007)が示唆されている。しかし、第三者から見た過剰適応者の様相を実証した研究はほとんどない。また、過剰適応傾向を測定する尺度(石津, 2006; 風間・平石, 2018)でもこの点が検討されておらず、尺度の妥当化に課題が残されている。

そこで本研究では、風間・平石(2018)が開発した OAS-RS の妥当化と過剰適応概念の再考のために、他者から見た過剰適応者の様相に着目した検討を行う。具体的には、自己抑制的な内的側面や他者志向的な振る舞いが周囲の他者に認識されているかについてペアデータを用いた比較検討を行う。

## 方法

**参加者** 中学生 384 名(男性 191 名)とその保護者 384 名(男性 179 名)、大学生 569 名(男性 286 名)とその保護者 569 名(男性 267 名)が調査に参加した。

**手続き** Web 調査会社を通じて調査への参加を依頼した。子供に対して OAS-RS(風間・平石, 2018)の両親用の項目を、保護者に対し OAS-RS(風間・平石, 2018)のうち両親用の項目を第三者が本人の振る舞いを推測できるよう改変したものへの回答を求めた。

## 結果

OAS-RS の下位尺度得点をもとに Ward 法によるクラスタ分析を行い、解釈可能性の観点から中学生 4 クラスタ、大学生 5 クラスタを採用した。その後得られたクラスタと自己抑制・他者志向性の評定(自己評価・他者評価)を独立変数、従属変数とした 2 要因混合デザインによる分散分析を実施した。その結果、大学生・中学生ともに過剰適応群の自己抑制の自己評価より他者評価が有意に低かった( $F(1, 564)=293.72, p<.001$ ;  $F(1, 380)=184.09, p<.001$ )。

## 考察

過剰適応の内的側面に関して、自己抑制の自己評価より他者評価の方が低かったことから実際よりも過剰適応者の自己抑制が過小評価されていることが示された。これは過剰適応者の不適応的な内的側面を第三者が正確に推測できていないことを示すものであり、石津・安保(2007)の示唆とも一致するものである。また、この結果は OAS-RS の妥当化に貢献するものだと考えられる。

本研究では他者から見た過剰適応傾向の推測について測定を実施したため、過剰適応者の実際の適応について測定できていないことが限界点として挙げられる。今後の課題として過剰適応者の実際の姿を探っていくことが必要である。

## 引用文献

風間惇希・平石賢二(2018). 青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討——関係特定性過剰適応尺度(OAS-RS)の開発を通じて—— 青年心理学研究, 30, 1-23.